

医師へのインタビューについて、自分で書き留めたメモをまとめてレポートを完成させましょう。

■ お話を伺った先生

◇ 名前：

◇ 診療科：心臓血管外科

◇ プロフィール（簡単な経歴）： 卒業  
日本外科学会専門医 臨床助教 5 年  
臨床医学 心臓血管外科学

■ 先生の診療科について

心臓血管外科

外科治療が必要な心臓、血管の病気にかかわる教育、研究、診療を行う。

■ 見出し（先生が考えられている「医師の魅力について」30 字程度まで）

目に見えて人を助けられて、また人の助けになれるところ。

<レポートには必ずタイトル・小見出しを付けること。付け方：1 (1) ①の順番で>

1. なぜ医師になろうと思ったのか

高校 3 年生の進路選択のとき、人のためになる職に就きたいとっていた。どの職業も人の助けになれるが、医師である父の背中を見てきたので、この職を選んだ。

(1) なぜ心臓血管外科を選んだのか

はじめは、救急科の道に進もうとしたが、紆余曲折あり、外科の道へ進むことにした。

そして、外科の中で一番難しそうだったので、この科を選択。

(2) どんな診療を行っているのか

はじめは、別の診療科から患者さんの紹介を受ける。その後手術などの治療をして、また元の科へ返す。

元の科に返さずそのまま退院というケースもある。

2. 複数の専門医になれるのか

なることはできる。外科の中にも様々な専門の科がある。（例：心臓血管外科、脳神経外科や、消化器外科 etc.）心臓血管外科の場合、まず、日本外科学会に入会する。その後、試験を受けて合格し、外科専門医資格を取得する。その後、日本胸部外科学会、日本心臓外科学会、日本血管外科学会の 3 つの学会のうち 2 つ、あるいは 3 つの学会に入会し、会員歴が 3 年を超えると、心臓血管外科専門医を取得できる。

Q. 例えば、フライトドクターを目指しながら心臓血管外科専門医になれるのか。  
救急科の勉強と並行して心臓血管外科の勉強も進められれば、可能。  
もし人が倒れていて、循環器の病気だった場合、その場ですぐに外科的治療が行えるのがメリット。

### 3. 今までで一番大変だった患者さんは？

24時間手術した患者さんが一番大変だった。もともと身体が弱く、条件が悪い時に大動脈解離<sup>1</sup>が起こってしまい、緊急手術をした。縫い終わって人工心肺を外そうとした時、また出血したので縫い直した。それを何度も繰り返したが、結局助けることができなかった。24時間手術をしたことももちろん大変だったが、何より一番つらかったことは、長時間苦勞して手術をしても助けられなかったこと。

### 4. 今まで治療を断念したことはあるか

ある。古澤先生が研修医の時、手術したらよくなるだろうという患者さんがいた。本人は、もう高齢だから手術はしたくないと、手術を拒否していた。しかし、家族はしてほしいと説得した。先生もなんとか説得を試みた。すると、本人が手術をすると言ったため、決行することにした。手術の準備を進めていたが、ほかの医師と話し合った、手術しても身体的に耐えられないという判断になり、手術は中止になってしまった。最終的に、翌日の晩に息を引き取った。このように、医師になると、“答えのない課題”に直面することもある。なによりも、患者の意思を尊重することが大切だ。

### 5. 手術を行う上でこころがけていることはなにか

いつも通りのことをすること。普段行わないような特別なことはしない。仮に緊急事態が起きたとしても対応できるように準備しておくことが大切だ。通常の手術の場合、準備に1か月ほどかけることが多い。もし、術中等、トラブルが起こり、自分では対処が難しいと判断したときは、ほかの医師に協力を求めることが大切だ。医療を行う上で、助けを求めること、つまりチームワークが一番大事だ。

### 6. これからの目標は何か

手術のオペレーターになること。つまり、術者としての独り立ちを果たすことだ。オペレーターは、技術的、または人材によってなれるかなれないかが左右される。古澤先生は、まだ若く手術経験が少ないため、経験を積んでいかなければならないとおっしゃっていた。

#### ■インタビューを終えて

#### ① 今回のインタビューを通して、あなたが感じた「医師の魅力」は何ですか。理由も付けて書きましょう。

私が今回の医師へのインタビューで感じた医師への魅力は、先生がインタビューで言っていた通り、人の助けになれることだと思う。医師になってしまえば人の助けになれることは当たり前であると思う人もいるかもしれない。しかし、患者の中には、どれだけ頑張っても助からない人もいる。手術が終わって患者さんが助かったときや、放っておいたら助からないような人を自分の手で助けたときのやりがいはいくら知れないものだと思う。

#### ② 医師への道を歩む決意を書きましょう。

今回、実際に現場で働かれている医師の方に直接インタビューをして、医師のやりがいや、魅力を深く知ることができた。医療界の厳しい現実なども聞かせていただいて、医師へのモチベーションをさらに高めることができた。先生からいただいた言葉を胸に叩き込んで、この3年間勉強に励み、また仲間との協調性を育んでいきたいと思う。

<sup>1</sup> 大動脈を構成する内膜、中膜、外膜のうち内膜が破れて血液が中膜に入り込むこと。そのままにすると血管が破裂してしまうことがある。

医師へのインタビューについて、自分で書き留めたメモをまとめてレポートを完成させましょう。

■ お話を伺った先生

◇ 名前：    先生

◇ 診療科：放射線科

◇ プロフィール（簡単な経歴）：

所属 臨床医学、放射線診断学

職業 臨床助教 1 年

■ 先生の診療科について

放射線科

主に X 線写真、消化管造影、CT、MRI、核医学、PET-CT、血管造影などの画像検査を行う。

■ 見出し（先生が考えられている「医師の魅力について」30 字程度まで）

助け合いながら、学び、患者さん一人一人のためになることをする。

## 1. なぜこの科に入ることにしたのか

もともと解剖学や法医学にあこがれを持っていた。大学に入って本格的に志望を決めるときそれらを生かせる放射線科を選んだ。放射線科のほかの科と大きく違うこととして、現場にいる必要がないということがあった。これから結婚、妊娠等を考えたとき、ほかの科では一定の期間働けなくなってしまうが、放射線科では家からでも行うことができるのでそういう点でも放射線科を選んだ。そして、そもそも自分自身、人の中身や血を見るのが苦手、患者さんとあまり話したくないというところも決め手となった。

## 2. 放射線科とは doctors` doctor

### (1) 放射線科の種類

放射線科には、 ①放射線治療                      ②放射線診断                      ③放射線核医学                      の3つがある。  
放射線による治療              放射線による診断              マイナーなものを扱う              という特徴がある。

### (2) 放射線科の強みや特徴

- ・ほかの科とは違い病気を視覚的に見ることができる。また、ピンポイントで視覚的に評価できる。
- ・画像から患者さんの背景や人生が想像できる。

### (3) 他の科との関わり

まず、すべての科関わっていて、外科はもちろん精神科や内科などともかかわっている。例えば内科との関わりでは、内科は放射線科を頼り、専門医でもわからないところについて調べてもらう。そのうえで考えを照らし合わせて、治療方針を決めたりする。

### (4) 検査時に大切にしていること

送られてきた写真のみで判断しない。その人の病状、検査目的、どういうひとなのか、家族歴、どういう生活や人生を持っているのか、というところまで見て総合的に判断しなければいけない。

### (5) 検査結果がまとまらないことはあるのか

検査結果がまとまらないことはしょっちゅうある。まず、自分で判断できないところはほかの経験が豊富な医師に助けてもらう。しかし、それでも定まらないときは、一発でこの病気と判断するのではなく、可能性のある病気をすべて出し、そこから一つ一つ可能性を消していく。この可能性を消していく方法は、専門の科の先生でも予想していない病気等が出てくるためすごく効果的。

## 3. 医者になるためのアドバイス

### (1) 高校生のうちは思いっきり遊ぶ

楽しむことがとても大事。その人とかかわる中でしっかりコミュニケーション能力を身につける。実際、放射線科はかなりの頻度で遊びに行っているそう。(先週はみんなで野球観戦！)

### (2) 先輩とのつながりを持っておく

先輩とのつながりがあれば、大学に入ったときにどの先生の授業がいいのか、どのように学習したらいいのかがわかるようになる。また、大学3年生からが正念場。

### (3) 研修期間では印象に残るほどいい

研修期間ではいろいろな科に研修しに行く機会がある。実際に大友先生の場合、名前が珍しく覚えてもらっていたため、医師になってからかわいがってもらえた、などということがあった。そのため印象に残るようなことを積極的に言うのも大切。(嫌いな先生には目を付けられないようにするのがポイントらしい)

## 4. 放射線科の意外と知られていないこと

### (1) バイトがあり、しかもやりやすい

オンラインで遠隔で行うことができ、しかも放射線科はもらえる金額もよい。

### (2) 放射線科でも手術がある

放射線のみを扱って、手術のようなものは一切しないと思われがちだが、実は手術も行う。体外のものではなく体内での出血に対して、足から針を差し込み、出血している部分まで届かせる。しかも、血液がなくなったら必ず死ぬため、ほかの手術よりも最優先で行われる。

### ■インタビューを終えて

#### ① 今回のインタビューを通して、あなたが感じた「医師の魅力」は何ですか。理由も付けて書きましょう。

医師は個々で淡々と作業をこなすイメージだったが、話を聞いているうちに明るくお互いを助け合う場面が多くあることがわかった。一人一人の得意分野を生かして、助け合えているところが今回の科の魅力だと感じた。また、話を聞いたところ仕事場の雰囲気はいつも明るくとてもアットホームらしい。さらに休日はよく放射線科のメンバーで遊びに行ったりするそう。仕事だけではなく、周りの環境も整っているのびのびと仕事ができているところに魅力を感じた。

今回インタビューした大友先生は自分の好きな分野である解剖学や法医学を中心に働いていて、自分の好きなものややりたいことを実際に仕事にしているのがすごいと感じた。

#### ② 医師への道を歩む決意を書きましょう。

自分はその科や仕事で何がしたいのかを明らかにして、仕事をこなすものとして認識するのではなく、周りの環境も整えていきたい。そのために、これから高校、大学を通していろいろなことを経験し、自分にあったものや、取り組みたいものを見つけたいと思う。また、今回は放射線科で自分が思っていたものと全く違う仕事内容もあったので、その科や色々なことを知ろうとするのも大切だと思った。

医師へのインタビューについて、自分で書き留めたメモをまとめてレポートを完成させましょう。

■ お話を伺った先生

- ◇ 名前:   
◇ 診療科: 検査診断学 (病態解析)   
◇ プロフィール (簡単な経歴):

日本血液学会、日本臨床血液学会、日本内科学会に所属。

■ 先生の診療科について

検査診断学は医師の中でもあまり知られていないマニアックな診療科です。様々な検査をしており、私たちの身近でいえば尿検査や血液検査を行っています。臨床を主にやっているので、患者さんを診察したりすることはあまりありません。

■ 見出し (先生が考えられている「医師の魅力について」30 字程度まで)

患者を直接見るわけじゃないが、患者を救う検査診断学

<レポートには必ずタイトル・小見出しを付けること。付け方: 1 (1) ①の順番で>

1. 医師が所属している「学会」とは

(1) 学会=医師が担当している専門分野の勉強会のこと!

Q. 医師は全員入らなければならないのか

A. 「専門医制度」というのがあり、その担当したい分野の専門医になるには取得しなければならないものなので、入るべき。

Q. 入るとどのようなメリットがあるのか

A. その専門分野の新しい知識を得ることができる。

(2) 内科と言ったらどんなイメージがありますか?

A. 実は8種類もあります

・消化器内科、呼吸器内科、循環器内科、神経内科、血液内科、腎臓内科、内分泌内科

・体の中を診察してもらう  
・風邪を治してもらう  
・アレルギー疾患になったときに通う

➡ だから「日本内科学会」に所属していても、内科の種類が多すぎて自分の専門ではない情報も交じっていることが多いそうです。(しかし、またそれも楽しいらしいです。)

2. 検査診断学

(1) 検査診断学的主要な仕事内容

医師の中でもマニアックな分野とされている「検査診断学」。その専門医である辻岡先生は普段、血液に関する研究をされているそうです。診療科は大きく分けて2つあり、1つ目が「基礎医学」2つ目が「臨床医学」で、臨床医学は主に病院で取り扱っている診療科のことで(内科、外科、耳鼻科…など)検査診断学もそのうちの1つで、私たちをサポートしてくれています。検査診断学が行っている身近な仕事は「尿検査」や「血液検査」です。一度はお世話になったことがあるのではないのでしょうか。聞いたことがあまりなくても、私たちの身近に溶け込んでいる診療科はたくさんあるのです。



## (2) 現在行っている研究

突然ですがみなさん「**骨髄異形成症候群**」をご存じですか？主に70歳～90歳の方がかかる骨髄の病気です。骨髄で生成された血球（赤血球、白血球、血球）の遺伝子に何らかの原因で、傷がついてしまい、形が壊れて使い物にならない血球の不良品が大量に作られることによって、貧血、感染症にかかりやすくなる、出血しやすくなる、などの症状が出てしまう病気です。しかし血液（骨髄）の病気はとても珍しい病気であるため、現在のこの病気に対する治療法はうまく発展していないという現状があります。

| 白血病患者数  | 肺癌患者数   |
|---------|---------|
| 3～4人    | 80人     |
| 100000人 | 100000人 |

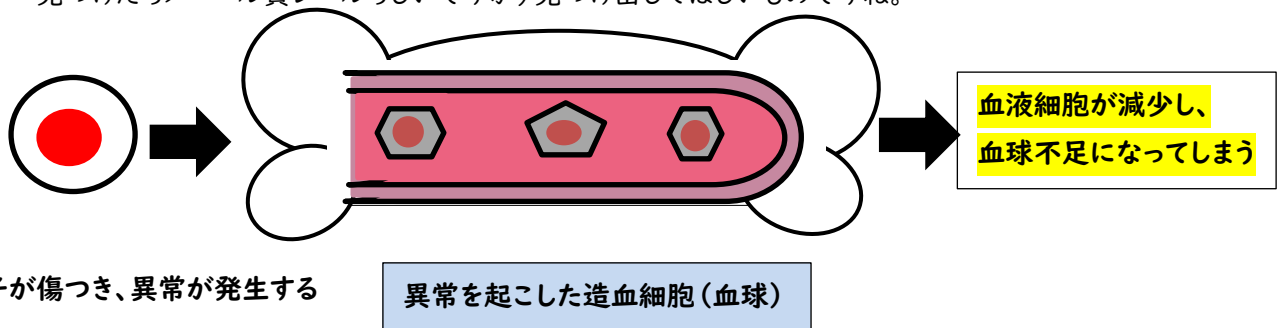
(一年間)

➡ このように、普通の**癌患者**よりも**血液（骨髄）関係の患者**のほうがかかる割合が低い

今ある治療法は、一度悪い血球をすべて取り除き、その後骨髄移植で新しい血球を作るという方法です。しかしこれにはデメリットがあり、それは**40歳以上の方が受けることができない**ということです。この治療はとても体力を要する方法なので、体力が衰え始めている40歳以降はとてじゃないけど受けられないといわれています。なので、40歳以降は**放射線治療や抗がん剤の投与**といったこれ以上病気が悪化しないよう耐えしのぐ以外の方法がないそうです。

そこで、先生は骨髄異形成症候群に効く薬はないかと日々研究室で奮闘されているそうです。MDS細胞（骨髄異形成症候群の細胞）を研究室内で培養し、今まではほかの治療法に充てられてきた薬をMDS細胞にも効くのではないかとMDS細胞にその薬を投与し、結果が出るかどうかを試しているそうです。（例えば、今まで胃がんの治療薬として使われてきた薬をMDS細胞に投与し効くか試すなど。）

この病気に悩まされている患者さんは日本にも数多くいるそうなので、一刻も早く（もしも治療薬を見つけたらノーベル賞レベルらしいですが）見つけ出してほしいものですね。



遺伝子が傷つき、異常が発生する

異常を起こした造血細胞（血球）

### ■ インタビューを終えて

① 今回のインタビューを通して、あなたが感じた「医師の魅力」は何ですか。理由も付けて書きましょう。

今まで私は、医師は必ず患者さんを診察して病気を治す職業だと思っていました。しかし、検査診断学というものを知り、そこでは患者さんを診察したりはせず、何十年も一つの病気の研究に打ち込み、向き合い、治療法を見つけてそれを患者さんに提供する仕事があると知りました。

それは、いわば病院内の縁の下のような存在であり、大切なものであるということを知ることができました。このような患者さんを第一線で治しているわけではないが、患者さんやほかの医師を支えている姿がまさに医師の魅力だなと感じました。

インタビューを通して、新しい観点で医師の魅力に触れることができました。

② 医師への道を歩む決意を書きましょう。

今回担当してくださった辻岡先生のように、人の話をよく聞いて、相手を第一に思ってくれるような医師を目指したいなと思いました。川崎の建学理念である「人間をつくる」に基づき、医師としての重要な人を思いやる気持ちを持った性格を築きあげていきたいなと思いました。